# 上林曉全集 十七

筑摩書房

増補改訂 上林暁全集第十七巻

昭和五十五年九月十五日初版發行

著者 上林暁

發行者 布川角左衛門

發行所 筑摩書房

東京都千代田區神田小川町二ノ八
電話 東京(291)七六五一(營業)
(294)六七一一(編集)
振替 東京 六—四一二三

印刷 法令印刷株式會社
製本 矢嶋製本株式會社

© 1980 A. Kanbayashi

(分類) 0393 (製品) 70317 (出版社) 4604

# 上林曉全集第十七卷目次

## 小說・戲曲　補遺


凡人凡日……三
千鳥……一二
晴れた朝……一六
弟は怠惰者である……一八
發掘（一幕）……四七
奥澤遞信大臣……五三
母親の星……五九
山の療養小屋……六五
爭議電車の中の童貞尼……八八
歌賣り……八九
結婚の贈物……九八
スエーデンの國……一〇三
月の祕密……一〇五
屠牛者……一〇八
南方の女……一〇九
襯衣の歌……一一三
子供……一一七
遊覽と葬式……一二一
海の魚……一二五
賣子の涙……一二六
町ゆき……一二八
青春やつれ……一三一
大振袖……一三三
白い紫陽花……一三六
山の療養小屋……一四二
驛の樣……一四八
野犬狩……一五一
春泥……一五三
女子乘馬隊……一五七


此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

心機一轉……一六一
汽車の中……一六二
つんぼ爺……一六三
屋臺挿話……一六九
嘶……一七三
秋口の晩……一七九
田園詩……一八四
緣切り……一九〇
歸去來……一九二
見合ひの話……二〇五
市兵衞さん……二〇八
先附小切手……二一〇
猫煩惱……二二三
＊
トンネルの娘……二二五
造り酒屋……二五〇
許婚者の死……二六二
非行中學生……二七三

## 童　話

（へんろ）……二八七
弘君……二九三
野犬狩……三〇一
赤いぜに……三〇七
母のおとづれ……三一〇
出羽ケ嶽……三一二
じまん話……三一四
福の小づち……三一七

## 俳　句

夏菊……三三五
病床吟……三三八
木の葉髪……三三九
枕頭の花……三三七
書誌……三三九

# 小說・戲曲　補遺

# 凡人凡日

## 1

「只今」

七時――納豆賣りの聲はまだそこらにこぼれてゐる、五月にしては薄氣味惡く底冷えのする朝である。ホテルのポーターをしてゐる主人が、レインコートの襟を立てて、今、夜勤から歸つて來た。

「お歸りなさいませ。お寒かつたでせう、今朝は」

主人の聲を聞きつけて、細君が障子をあけて出迎へた。

「とても寒いねえ。……今朝も花貰つて來たよ、これ、きれいだらう」

主人は靴脱ぐ手を休めて、チウリップと葵の花の一束を細君の前に差し出した。昨夜、ホテルであつた宴會用の殘りである。

「まアきれい！」

細君は詠嘆の聲を放つて、主人の手から取り上げた花に見入つた。細君の背中では、多美ちやんが寒さうにすくんだまま、大きな黑い眼玉を轉がしてゐる。

「おつ母さん、此の花綺麗でせう」

婆さんは臺所で飯を煑くかたはら、おみおつけにする筍を細かく截つてゐる。細君は花をそこへ持つて行つたのである。

「きれいだわねー。此の間のよりよつぽどいい」

婆さんは頭から上をしやくつて、細君より更に誇張的な、持ち前の詠嘆で感心した。この詠嘆を聞くと、細君の詠嘆は、此の仲の好い姑から無意識の中に影響を受けてゐるのだといふことは、たやすくうなづける。婆さんは更に、

「篠ノ井さんにも分けてあげるといいわ」と附け加へた。篠ノ井さんといふのは二階に下宿してゐる大學生のことである。

「今日は活動の招待券も貰つて來たよ、五枚」やがて座敷に上つた主人は、金ボタンのついた制服のポケットから招待券を五枚取り出して、長火鉢の縁へ並べて見せた。

「どこの？」花瓶に花を挿しながら、細君が訊いた。

「松竹館の一等席だよ」

「いつまで通用するの？」と婆さんが訊いた。

「五月中とあるよ。明後日行くとしよう、定休日だから」

「今度は宇多を連れてつてやるといいよ」と婆さんは主人を顧みた。

「いいえ、わたしはいいの、おつ母さん。おつ母さんがいらつしやいよ」と細君は辭退した。

「おつ母さんは此の間市村へ行つたからいいんだよ。みんな出ると留守番がなくなるから、今度はお前が行つてお出でよ」

婆さんは嫁に勸めた。結局、明後日の晩、細君は主人と一緒に松竹館へ行くことになつた。多美ちやんが生れてから半年ほどの間に、細君が活動に行くのは、これが二度目である。

それから間もなく、婆さんと細君とは、つつましやかな朝の食卓についた。ホテルで食事を濟ませて來た主人は朝湯に出掛けた。出掛ける時、婆さんが後から聲を掛けた。

「禎吉、お前髭を剃つてお出でよ。あんまり延びると見つともないから」

「うん、剃るつもりで、ちやんと剃刀を持つてるよ」

主人は手拭の中に包んだ西洋剃刀を見せてから、ピシッと戸を閉めて出て行つた。と同時に細君が急に笑ひころげた。婆さんと主人との會話が、子供らしくて、他愛ないのが、をかしかつたのである。その笑ひがまだ終らない中に、危ぶない腰付きで坐つてゐた多美ちやんが、顏を扇して一つ大きな嚏をした。細君はいよいよ腹をよぢらせた。婆さんも箸を下に置いて、飯のつまつた咽喉でコンコン咳き上げながら、消え入るやうに笑ひころげた。

## 2

九時すぎに二階の篠ノ井君が起き上つた。いつもの通り床の中で新聞を讀んでゐたが、それにも厭いたのだらう。西の窓のカアテンを繰つてしまふと、南の窓の雨戸をあけた。洗面器の中へ石鹸箱やコップを拾ひ込む音を、頭の髓を搖がせるやうに響かせると、やがて篠ノ井君が階段を降りて來た。

「お早う御座います」

「お早う御座います」

「お早う御座います」

細君は多美ちやんをおぶつたまま、臺所の外の狹苦しい所に盥を据ゑて、俯向き込んで洗濯してゐる。茶の間と客間と居間とを兼ねた薄暗い八疊の間の隅の方では、婆さんが明るみを拾つて着物の綻びを縫つてゐる。篠ノ井君が昨夜頼んだものである。主人はもう路次に面した三疊の部屋で、白い顏を仰のけて眠つてゐる。あたりが靜かでさへあれば、その疲れた唇の間から、齒ぎしりの音も洩れて來るはずだ。毎晩九時に出て朝七時に歸つて來るまで一睡もしないのだから、主人の睡眠時間はいつでも喧騷を極めた大都會の眞畫である。

「お寒うございますねえ」

例によつて篠ノ井君の朝の便所は長かつた。出て來た時

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

に婆さんがさう云つた。

「變ですなア、五月も中程になつて……逆轉ですなア」

かう言つた篠ノ井君は寢卷の白い浴衣を一枚引つかけてゐるきりである。

「もうそろそろセルの季節ですのに、かう寒くてはからだに毒ですねえ」

細君が向うを向いたまま言つた。篠ノ井君は齒磨で染つた赤い唾を吐きながら、

「さうですなア、これではまだ羽織が脫がれないですなア」と答へた。篠ノ井君には季節に應じたセルの單衣がない。そして、そして、それは毎年此の季節になると欲しくてたまらなくなるものの一つである。それにしても今年はまだ袷羽織でゐられるとは、篠ノ井君にとつて何といふ心强いことであらう。

篠ノ井君は顏を洗ふと、臺十能に火種を入れて貰つて階段を昇つて行つた。

婆さんは着物を捨てて立ち上つた。冷えきつたおみおつけをもう一度煖めねばならぬ。澤庵を切らねばならぬ。疊んで置いた食卓を、も一度持ち出さねばならぬ。それらを整へてから婆さんは二階へ聲を掛けた。

「はい」

元氣な返事をして篠ノ井君は又階段を下りて來た。浴衣の上に丹前を着込んでゐる。

「篠ノ井さん、お花を上げませうか、禎吉がホテルからお殘りを貰つて來たんですよ」

篠ノ井君が食卓に就かうとすると婆さんが言つた。

「さうですか、一ついただきませうか」

「ええ」

婆さんは二階へ上つて、一年餘りも花を挿したことのない篠ノ井君の安花瓶を持つて下りて、水を入れて、葵の花を挿した。

「きれいですなア」

篠ノ井君は飯を食ひながら、婆さんや細君の詠嘆のあとを追つた。

婆さんは大事さうに花瓶を提げて、又二階へ上つた。

篠ノ井君がゆつくり腹を充たして立ち上つた時、時計のガリッと引つ掛る音が聞えた。十時五分前であつた。

## 3

それから、二階と下とでは夫々朝の營みが行はれた。

篠ノ井君は椅子に凭れて高等學校時代の寮歌を歌つた。机の上には朱色の葵の花が、水の玉を止めたまま、室內を華やかにしてゐる。が、硝子戶の外には、雲を疊んだ憂鬱な空が、寺の庭に一本突つ立つた樅の木の天つ邊に懸つてゐる。そのうちに、彼はふと聲量を浪費してゐることに氣附いたのだらう、歌は止めて、彼はワーズワースの詩集を

取り出して、出來るだけ流暢ぶつて讀んだが、精神の高揚は少しも見えない。明治時代の文人に大きな感化を與へた此の泰西の詩人の詩も最早や近代人の頭には枯淡に過ぎて、感覺的な所がない。其の上聲量が減ずると共に、詩のリズムに對する味ひも更に乾燥して行く。で、彼はそれも止めた。

次ぎには有島武郎全集を開いて、青年時代の日記を讀んだ。眞面目に人生に惱んでゐるのに感心してゐたが、結局、愚痴の連續、祈の繰り返へしに過ぎない。二十ページ位でそれも閉ぢた。

最後に昨日の日記をつけた。昨日も平凡で退屈だつた。たつた一つ大書すべきことは、ポートワインを買つて來たことだ。篠ノ井君は近頃神經衰弱に罹つてゐる。だから、ポートワインを飲んで活力を得ようと云ふのだ。昨夜買つて來てから寢るまでの間に三度も飲んだ。すると、からだが解體して行くやうないい氣持だつた。今朝も目がさめるなり床の中で飲んだのに、今また日記をつけ終ると、いつの間にやら罎の栓を拔いてゐた。罎の口に唇をつけてぐいと飲むと、篠ノ井君は英語の辭書を枕にしてごろりと轉んだ。

細君は洗濯物を入れたバケツを提げて二度も三度も二階の物干へ上つた。天氣さへよければ、干して行く手許から湯氣が立ち上るのだが、今日の洗濯物は泣き面のやうにじめじめしてゐる。細君は干してしまふと、篠ノ井君の隣りの空き間を掃いた。丁度掃除のすんだ所へ、婆さんが一人の大學生を案内して來た。空き間を見せるのである。

大學生は威嚇するやうに大きなロイド眼鏡をかけてゐる。

「四疊半ですねえ」

「はい」

「陽はさすか知ら」

「東からさしますんですよ」

「隣の部屋にも誰かゐるんですねえ」

「やつぱり大學の方が……」

「何科ですか」

「家政科」

「家政科？　經濟科ですか」

「ええ、ええ、經濟科。おとなしい、それはいい方ですよ」

婆さんと大學生との會話の間、細君はおどおどした樣子で多美ちやんの方へ首を捩ぢ向けて、多美ちやんの指先を舐めてゐた。まどろみかけてゐた篠ノ井君は、婆さんの此の最後の言葉をきくと目をつむつたままかすかにほほゑんだ。

「僕は六疊が望みなんですから……どうも失禮しました」

今度は大學生が先きに立つて、婆さんが後につづいた。細君はも一つの階段から臺所の方へ降りた。

金魚瓶の水ももうかへるやうになつてゐたので、婆さんと細君とは二人がかりでかへにかかつた。寒さと營養不良で金魚の腹は氣の毒なほど細つて、鱗の光が錆びてゐる。それでも、新鮮な水の中へ入れられると、生れ變つたやうに元氣に尾を振つた。

今度は八百屋がやつて來た。嫁と姑とは外に出て車の側に立つた。同時に、隣りの家主の肥えたおかみさんも出て來て、饒舌を振つて青物の品隲を始めた。其の時丁度、飛行機が爆音を立てて頭の上を飛んで行つた。婆さんは泥のついた馬鈴薯を持つたまま、おかみさんは筍を抱いたまま、細君は後に廻した手で多美ちやんのすべすべした足を支へたまま三人が三人とも口をあんぐりあけて、銀色に光る白い翼を見上げた。

やがて午砲が鳴つて、砲兵工廠の汽笛が鳴つて五分と經たない中に、篠ノ井君はまた下へ呼ばれた。食卓の上には、輪切りにした烏賊の煮〆と汁とが湯氣を立ててゐた。おなかは大きいし、飯は冷えてゐるし、二杯位で控へるつもりだつたが、舌を燒くほど熱い汁を吸つてゐる中に、篠ノ井君の食欲は意外に進んだ。

篠ノ井君の終るのを待ちながら、細君は家の前の路次に立つて、背中の多美ちやんと一緒に路行く人々に細い觀察の眼を投げてゐた。婆さんは臺所口にしやがんで、病みほうけた三毛猫の頭を撫でてゐた。

篠ノ井君は四杯食つた。

## 4

午後四時。

主人は眠り足りない樣子で火鉢の前で煙草を吸つてゐる。今朝剃つたばかりの頰から顎にかけて、外光を受けて青くつやつやと光つてゐる。婆さんと細君とは多美ちやんを中にして坐つてゐる。多美ちやんは手に餘る玩具を弄びながら、わけのわからぬことを喋つては、他愛もなく笑ふ。笑ふ度に、

「をかちいなア」

と云ひながら、婆さんと細君とは交る交る多美ちやんの顎のあたりをもて扱ふ。主人も引き入れられたやうに、

「ハッハッハ」と咽喉に引つ懸つた聲で笑ふ。

「多美ちやん、多美ちやん、おつむてんてんは、おつむてんてんは……」

細君はおつむてんてんをして見せた。多美ちやんは可愛い手をあげて、黑い髪の揃つた頭をたたく。

「多美ちやん、お悧巧ねえー」

細君と婆さんとは聲を揃へて稱讃した。

「今度は『今日は』、『今日は』をして……」

多美ちやんはすぐには思ひ出せないらしい。一寸の間きよとんとしてゐたが急に思ひ出したやうにがくんと首を前

に下げた。

「そんなに力を入れなくつてもいいよ」

「首が折れるわよう」

二人は相應じて笑つた。多美ちやんも齒の生えかけた口をあけて嬉しさうに笑つた。すると、細君は發作的に多美ちやんを抱き上げて、柔かな頰の上へ口をつけてブリブリと鳴らした。

「赤ちやん、赤ちやん」

外で歌でも歌ふやうな聲で呼ぶものがあつた。

「赤ちやん、赤ちやん」

も一度呼んだ。

「正夫ちやん、いちつちやいな」

細君の聲に應じて勢よく戸をあけて隣の家主さんの孫の正夫ちやんが這入つて來た。五つである。おできのした頭をグルグルと繃帶して、その下からきかぬ氣らしい大きな目を光らせてゐる。水淺黄の帶には玩具の大小をさしてゐる。

「赤ちやん、赤ちやん」

正夫ちやんは多美ちやんの側へにじり寄つて、柔い指先きを弄ぶ。時々口にくはへる。多美ちやんは嬉しさうに、厚ぼつたい袖の中に埋もれた兩手を鳥の翼のやうに上下する。

「正夫ちやんは赤ちやんお好き?」

細君の質問に對して、正夫ちやんは言下に答へた。

「大好き」

さうだ、正夫ちやんは赤ちやんが大好きだ。一日に何度となく「赤ちやん、赤ちやん」と言ひながらやつて來る。時には折惡しく、

「赤ちやん今ねんねしてるから、御飯すんでからいらつしやいね」

と言はれて引つ返へさねばならぬ時もあるが、大抵の場合は座敷に上つて、赤ちやんの側で大はしやぎにはしやぐ。

「また明日來ラア、失敬」

歸へりがけには、きまつてさう云つて行くが、三十分と經たぬ中にすぐ、

「赤ちやん、赤ちやん」と表に立つて呼ぶ。さうだ、正夫ちやんは小さな多美ちやんに戀してゐるのだ。大きくなつて初戀の經驗を追憶する時、きつと正夫ちやんは、五つの時、隣りの赤ちやんに戀したことまで溯るであらう。

「エー、オー、エー、ケー」

赤ちやんの側を離れた正夫ちやんは、ラヂオ放送局の符號を叫びながら、部屋中を駈りはじめた。

「正夫ちやん、いい子だから、靜かにするんですよ、ねえ、いい子だから」

細君になだめられると、正夫ちやんは今度は婆さんの膝の上に飛び乘つた。

「エー、オー、エー、ケー」
「ヂェー、オー、エー、ケー」
主人が「ヂェー」に力をこめて教へる。だが、正夫ちやんは相變らず、「エー、オー、エー、ケー」と叫ぶ。
「ヂェーだよ」
「エー」
「ヂェー」
「エー」
「ハッハッハ……」
主人は大口を開いて笑つた。

5

「篠ノ井君、近頃どう？　面白いことはない？」
「相變らずブラブラしてゐるが、『人生の春は過ぎて行く』といふ感ばかりだねえ」
午後二時間の講義を聽いた篠ノ井君は友人の藤林君の下宿にゐた。藤林君は風邪でもう一週間も寢てゐる。だが大した容態ではない。
「神經衰弱はどう？」
「どうもよくならない、昨日から精力をつけるつもりでポートワインを飲んでゐる」
「ポートワインは大してきき目はないよ。まア、折角でロなほしだねえ」

醫者を兄に持つ藤林君はポートワインの效能を否定した。さう云はれると、篠ノ井君もはずみが拔けたが、效能如何は別として、ただ飲んだあとで愉快にさへなればよいと思つて、藤林君の言葉に依つてポートワインから去らんとする氣持を僅に支へた。
「いいものを見せようか」
篠ノ井君の顏色を覗ひ覗ひ藤林君が云つた。顏は赤らめてゐる。
藤林君は敷蒲團の下から封筒を取り出した。その中には二通の手紙が入つてゐた。一つは書簡箋の上に鉛筆でたどたどしく書いてあつた。カッフェの女給をしてゐる藤林君の愛人が、盲腸炎で入院してゐる病院からよこしたものだ。
篠ノ井君は讀んでみた。女は熱に浮かされてゐる。だが哀切だ。私はもう助からない。若し私が死んだなら、どうか一度でいいから墓を弔つて下さい。そんな風に綿々の情を述べた末、生れ故郷の東北の或縣を郡まで書いて、そこでポツリと切つてある。
卷紙に認めたもう一通を取り上げる時、篠ノ井君は藤林君の方をちらと見た。藤林君は眼鏡をはづした目をしばたたいて天井を見上げてゐた。それは附き添ひの看護婦の筆だつた。
「私は友子さんの附き添ひの看護婦です。まだ一度もお目

にかかつたことはありませんけれど、友子さんから始終あなたのお噂はきいてゐます。友子さんは朝から晩まで、あなたのことばつかり言つてゐます。今さつき、私が一寸そばを離れた間に、友子さんはあなたに手紙を書いてゐたのです。私はびつくりして、すぐお止めしました。その書きかけのお手紙がここに封入してあるのです。そのあとで大變熱が出て心配しましたが、今はすやすやと眠つてお出でです。ほんたうに子供のやうでいらつしやいます」

篠ノ井君の左の眼頭に涙が一つ生れた。近頃、芝居や活動で人情話を見ても涙を誘はれることの稀れだつた篠ノ井君にしては、今日は少し脆すぎる。やつぱり神經衰弱のせゐかも知れない。涙は靜に睫毛を離れて、頰を轉落した。

「ほんたうに子供のやうでいらつしやいます」此の文句は確に篠ノ井君のセンチメントを衝いたらしい。

「私はどんなことがあつても、友子さんを全快させて見せます」

最後はさう結んであつた。篠ノ井君の眼からは涙が止め度なく流れた。ズボンのポケットからハンカチを出して拭つた。彼は泣き笑ひの顏をしてゐる。手紙を卷き直す手に一向力がはひつてゐない。相愛する二つの心、更にそれに深い同情を濺ぎ込まうとする心——篠ノ井君の眼は確に、それらの心を擊ぎ合はせてゐる溫い觸手を見詰めてゐるやうでゐる。

はじめ友子さんの手紙を讀んだ時は篠ノ井君は餘り感動しなかつた。戀する者が病氣になつた時には、寂しさの故にその病氣を絕望的に考へるのは普通有り勝ちなことだと思つて、或る程度以上の新しい共感を友子さんに對して呼び起すことが出來なかつたのであらう。それが、看護婦によつて友子さんの可憐な姿を見せつけられると、彼はわけもなく同情してしまつた。友子さんの戀をおほし立てようとする看護婦のいぢらしさに依つて、友子さん自身をもいぢらしくなつたのだ。

藤林君は篠ノ井君の涙を見つけた。

「すまない、すまない」

藤林君は篠ノ井君から手紙を取り戻して卷き始めた。眼も赤くしてゐる。

「楠田君の赤ん坊はまだか知ら」

二人の間の重苦しい沈默に堪へかねて、篠ノ井君が話頭を轉じた。實際、藤林君は篠ノ井君の涙によつて感慨を新しくされてゐたし、篠ノ井君は涙を流したあとの沈鬱の爲に氣持がこはばつてゐたのであつた。

「今日か明日だらう」

藤林君も殊更氣を引き立てて言つた。

「もうそんなに切迫したのか知ら」

「どんな名をつけたらいいのだらう、考へて置いて呉れと言つてたよ」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com